「日々の理科」（第 1276 号） 2018（H30),-1,-3

北極圏旅行記 2017-2018 冬（９）

～12/28 北極圏の風景～

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

（３ページ目に拡大写真）

旅行者にとって、冬の北極圏の風景はオーロラだけではない。上の写真は「ユールストック」といって、クリスマス前後に、家庭やオフィスの窓辺に、必ずと言って良いほど飾られている。「建物に一つ」ではなく、「一つの窓に一つ」である。私の自宅にも山荘にもこれが飾ってある（一年中)。

この朝はよく晴れていた分気温は低く、氷点下 23℃。外で呼吸すると、鼻孔が凍りつくのがわかる。

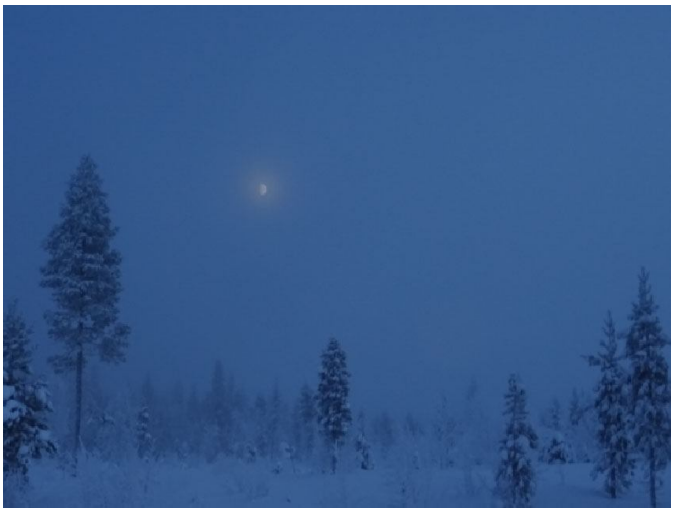
このあたりの緯度（北緯 67°超）では、極相が針葉樹林である。いわゆる「タイガ」と呼ばれる森だ。その中に樺の木の落葉樹が混ざり、混交林を構成している。どちらも樹氷に覆われ、ピクリとも揺れない。こんな低温化で維管束（水や養分の通り道）が凍らないのかというと、実際凍るらしい。凍ると水分はわずかに膨張する。氷点下 40℃を越える、ものすごく寒い晩、森の奥から「バチーン！」と音がするのは、樹木が凍って裂けた音である。これを「凍裂」という。

（４ページ目に拡大写真）

木々の間から、半月が昇ってきた。半月よりも少し月齢が高い。しかし地平高度は低い。日本では半月が南中していて（明暗境界線が垂直になっていて)、これほど低いことはない。天体の見え方もちがうのだ。

この日はオーロラが出そうだったので、少しでも明るいうちにロケハンに出かけた。オーロラの観望には、地上物が少なく、地平線まで見渡せる場所が良い。特に北の空は開けていることが大切だ。宿泊地から北へ7km ほどのところに、適地を見つけた。

オーロラ観測は、北へゆくほど有利なので、更に北へも行ってみた。しかし「アイス・フォグ」に視界を遮られてしまった。



アイス・フォグ（氷霧）は、空気中に浮遊する霧粒（超冷却の水滴）があまりの寒さに凍ってできた、極めて粒の小さい氷の霧だ。－20℃以下でないと発生しない。ダイヤモンド・ダストは、１粒ずつの氷晶を目で確認できるが、アイス・フォグは粒を識別できない。

車の外気温計は－27℃を示している。今回の旅行で体験した最低気温だった。

ヴィッタンギの村に戻った。西部劇に出てきそうな淋しい街だが、暗い北極圏にあって、光の島のようだ。

コープで買い物をした。野菜、肉、飲料、日用品、冷凍食品、何でも売っている。今回の滞在で、このスーパーの存在は大変有難かった。

北極圏の窓辺
スウェーデン・ノルボッテン州・マスグンス村
2017,12,28 / C.Tanaka

北極圏の月
スウェーデン・ノルボッテン州・マスグンス村
2017,12,28 / C.Tanaka